

## I 学校の概要

### 学力向上モデル校事業 高松市立香川第一中学校

#### ◆児童生徒数及び教員数

○生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
5 学級 174 名	6 学級 192 名	5 学級 185 名	3 学級 13 名	14 学級 564 名

○教員数 51 名

#### ◆学校の特色

本校では、生徒の多くが部活動に熱心に取り組んでおり、地域をあげて盛んなハンドボール競技をはじめ、バレーボール部やバドミントン部など、全国大会に度々出場する部もある。地域の方や保護者の部活動に対する期待も大きく、学校教育活動にも概ね協力的である。生徒は、生徒会の決めたスローガン「努力・信頼・思いやり」のもと、前向きに、活気ある学校生活を送っている。

本校の生徒の多くは、素朴で人懐こく、教員の指示を素直に聞き入れて行動しようとする。行事等には友人と協力して一生懸命に取り組み、協働することに価値を見出せている。しかし、その一方で、少しでも困難さを感じるとすぐに諦めてしまう面があり、粘り強く取り組んだり、軌道修正してよりよい方法を見つけたりすることに課題が見られる。また、集団の中で自信をもって自分の意見を言えない生徒も増えており、そのため、集団で活動することにストレスを感じたり、自分を認めてもらえないと思ったりして、グループやペアで活動しても効果が上がらないといった課題がある。

## II 研究主題等

研究主題

### 自他のよさを認め、主体的に未来を切り拓く集団づくり

—みんなが楽しいと思える学校づくりを基盤とした生徒指導の推進—

#### ◆研究主題設定の理由

本校は平成29年度からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善に取り組み、「分かる楽しさ」「できる喜び」を味わわせ、学ぶ意欲をもって主体的に学習に向かう生徒の育成に取り組んできた。ユニバーサルデザインの視点である「焦点化」「視覚化」「共有化」を教員が意識して、誰にとっても分かりやすい授業の実現をめざしてきた。その結果、県学力状況調査の生徒質問紙における「授業が楽しいと思う」や「授業の内容が分かる」の質問に対し、6割を超える生徒が好意的な回答をした。この数値は県平均を超えており、授業に前向きに取り組むようになった生徒の姿がうかがえる。

前年度からは、令和4年度香川県中学校教育研究会生徒指導部会での研究発表会に向けて、生徒指導の三機能である「自己存在感の育成」「共感的人間関係の育成」「自己決定の場の設定」を意識して授業を組み立てる

ことを研究の柱とし、最終目標として、自己指導能力を高める取組を行っている。しかし、「学級で安心して自分の意見を言うことができる」「学校に行くのは楽しいと思う」という質問に対する好意的回答が県平均を下回っていた。このことから、学校生活において、生徒が他と受容的に関わることに課題があることがうかがえた。

先の読めない時代だと言われている昨今、主体的に他者と協働して未来を切り拓く力が求められている。その力を育む基盤として、受容的風土があり、安心して発言し協議し合える環境が必要であろう。そこで、生徒指導の三機能を教科指導の場だけではなく、学校生活の諸活動の中で働かせることで、人権意識を育み、自尊感情の高まったあたたかい集団をつくりたい。そして、学力差を意識せずに自分事として話し合える課題を学級で話し合う「一中学級力向上プロジェクト」を通して、生活を改善していくと同時に、話し合いが円滑に行われるような関係をつくる。その上で、今まで本校が取り組んできた「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業」で基礎・基本の定着を図りつつ、自己存在感を高め、主体的・協働的に課題解決し、学び続ける生徒を育成したいと考え、研究主題を設定した。

#### ◆研究内容及び方法

- 1 生徒指導の三機能を働かせた受容的風土を育てるための工夫
  - 各教科で(1)～(3)の観点における授業での工夫を考え、実施する。
  - (1) 自己存在感を高めるための工夫
    - ・ Q-U 調査の分析をもとにした生徒一人一人を生かす工夫
  - (2) 共感的人間関係を築くための工夫
    - ・ 協働的・対話的な学びを授業に取り入れる
  - (3) 自己決定の場を作るための工夫
    - ・ 学習課題の研究と振り返りの方法の研究
    - ・ 課題や学習方法の選択の工夫
- 2 組織作り

教科研究部会	生徒指導・道徳部会 (なかまづくり部会)	特活部会 (学級力向上部会)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学ぶ意欲を育て、「分かった」「できた」「楽しい」と思えるように、生徒指導の三機能を生かした授業作りを工夫・実践・評価する。</li> <li>・ 考える場、表現する場、認め合う場の意図的な設定や、生徒への配慮等の支援を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の実態調査・分析・対策・追跡調査 (Q-U 調査から) から変容を探り、改善策を練る。</li> <li>・ 特別の教科「道徳」の授業を通して、道徳的価値について主体的に考え、議論できる学習を研究するとともに、認め合える関係作りをする。</li> <li>・ ピア・サポートやストレングスカードを利用した社会性の育成や対立解消スキルトレーニングを通して、安心して過ごせる集団作りを推進する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒一人一人が安心して楽しく学校生活を送るための学級力向上プロジェクト指標 (一中モデル) を作成する。</li> <li>・ 生徒会や学級会実行委員が中心となり、生徒自らが指標を生かして、学級力を可視化分析し、改善に向けて自律的に働きかけるような学習活動を設定する。</li> </ul>

### III 研究実践

#### ◆指標設定と達成に向けた取組

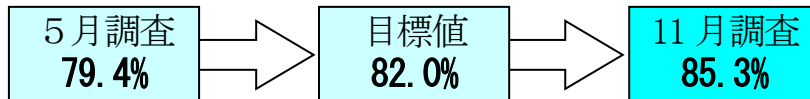
1 (生徒アンケート) 授業で、自分の意見や考えを認めてもらえたと感じましたか。

指標 「①はい」の合計



2 (教員アンケート) 生徒の実態を把握し、授業のどの場面でどのように活躍させるか、工夫していますか。

指標 「①している+②どちらかというとしている」の合計



#### 指標の達成に向けた実践

##### 1 生徒指導の三機能を柱とした授業づくり

研究の柱となる「授業の中で自己存在感を育成するための手立て」「授業の中で共感的人間関係を築くための手立て」「授業の中で自己決定の場をつくる手立て」について、各教科で重点的に取り組む内容を話し合い、共通して実践するようにした。さらに、学校共通の学習指導案に手立てを明記することで、研究授業後の授業討議が、教科や学年の枠にとらわれない有意義な話し合いとなった。

##### 【生徒指導の三機能の視点を取り入れた授業(例 国語科)】

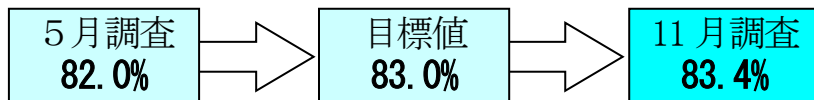
文部科学省「人権が尊重される授業づくりの視点例」より		教科(国語)	
機能	ねらい	留意点	
自己存在感	「授業に参加している」という実感をもたせる	・活動や学習内容に応じた座席の工夫、発問・応答のパターンの工夫 ・課題設定の工夫 ・生徒の習熟度に合わせて複数の課題、ワークシートを準備 ・結果だけでなく、思考や学習の過程を認める	手立て ・学習の流れの提示 ・ICTを活用した視覚的な説明 ・デジタル教科書や映像教材を使用 ・前置事項を丁寧に確認し、新しい内容へのスムーズな展開を図る ・書きやすくなるためのキーワードの提示 ・「よく考えているね」「がんばっているね」等の承認や賞賛、励ましを積極的に行う ・計画的な人間指導のもと、一人一人のよいところを具体的に評価する
	「自分が必要とされている」という実感をもたせる	・意図的指名等、一人一人の活躍の場の設定 ・互いの発言を最後まで聞く態度の育成、誤答を大切にする ・ペア・グループ等で協力して活動できる場を工夫し、互いの考えや方法のよさに気づかせる	
共感的育人的関係	教師一人一人を大切にすることを示す	・一人一人の名前を呼び、目を見て話す。 ・発言しない生徒に配慮し、記述等の手立てを講じる ・承認・賞賛・励ましの言葉かけをし、個に応じた改善方法を示す	・話し合いの視点・仕方の提示・相手を意識した発表と質疑応答 ・聞き合える、教え合える場の設定 ・失敗や間違いを受け入れる雰囲気作り(拍手、発表者の方を見て聞く) ・相互評価ができ、互いのよさを認め合えるワークシート作成 ・発表に対して、うなずきや相づちで応える。
	「自分が受け入れられている」と実感できる雰囲気をつくる	・一人一人が自由に発言できる雰囲気作りを行う ・教師の意図と異なる考えも切り捨てない	
自己決定の場	「共に学び合うなかまだ」と実感できる雰囲気をつくる	・他者の発言や作品のよさに気づき、学ぼうとする態度を育てる ・自分の意見と異なる意見や感情を拒絶せず、理解しようとする心情を育てる ・他者の気持ちや立場を考えて自分の発言を選択する態度を育てる ・互いの役割や責任を認め合う態度を育てる	・学習課題、発問の工夫 ・学習方法・形態の選択 ・自分の言葉でのまとめ ・自己の学習到達度を把握する振り返りシート ・小テストの実施(言語事項の確認) ・考える視点や方法、調べ方について情報を与える ・気づいたことや考えたことをノートに記入するなど、意見交換の前に考える時間を確保する ・ペアやグループ、学級の中で自分の考えを発表する場を設定する
	学習課題や計画を選択する機会を提供する	・複数の学習課題の中から自分にあった学習課題を選択する機会を設定する ・発達段階に応じて、学習の見通しをもって計画を立てるための支援を行う	
	学習内容、学習教材を選択する機会を提供する	・生徒の実態を踏まえた多様な教材・教具の準備をし、選択の幅を広げる ・習熟度や興味・関心に応じた教材・教具を選択できる場の設定	
	学習方法を選択する機会を提供する	・課題解決のための情報や資料を準備し、活用方法について助言する ・生徒の実態や学習内容に応じた学習方法を提示する	
	表現方法を選択する機会を提供する	・生徒の実態を踏まえた多様な表現方法を提示し、選択の幅を与える ・考えをまとめるための多様な学習ツールを準備する ・相手や内容に応じた表現ができるように、多様な表現の型を提示する	
学習形態や場を選択する機会を提供する	・生徒の実態や学習内容に応じた学習形態や活動の場を多様に提示し、選択の幅を与える		
振り返りの方法を選択し、互いの学びを交流する機会を選択する	・生徒の実態や学習内容に応じた学習成果のまとめ方を多様に提示し、選択の幅をもたせる ・自他の学習課題や解決方法、まとめ方を振り返り、交流する時間を設定し、他者の成果に学ぶと共に、今後の学習課題や方法について選択・決定できる場を工夫する		

- ・ユニバーサルデザインの視点(焦点化・視覚化・共有化を含む)
- ・協働的な学習の手立てを含む



**3 (生徒質問紙) 学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。**

指標 「①できている+②どちらかといえはできている」の合計



**指標の達成に向けた実践**

**1 一中学級力向上プロジェクト**

教科の学習が不得意な生徒が学習能力に左右されず、しかも話し合いたいと思える課題として、「一中学級力向上プロジェクト」(図Ⅱ)を設定した。「一中学級力向上プロジェクト」とは、よりよい学校(学級)にするために、自分たちの生活を見直し、改善するにはどうすればよいか、学級で考え、実施していくプロジェクトである。学期に一回、振り返りとしてアンケートを実施し、その結果をもとに、再度話し合いを行って対策を練り直していく。

生徒たちはこの活動を通して、課題に対する自分の意見をもつこと、相手の意見を尊重して聞くこと、決議の際は、多数決で決定するだけではなく、折り合いをつけたり合わせたりしてよりよい案に練り上げることの大切さを感じていた。また、学級の友達と意見を交流させた学級会後の感想では、「自分では考えられなかった対策案が友達との話し合いで出た」「話しているうちに、いろいろなアイデアが出てきた」など、考えの広がりや深まりが見られた。

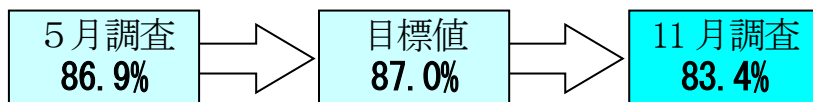


**図Ⅱ :「一中学級力向上プロジェクト」の流れ**

5月に行われた中学校3年生対象の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙における「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」に対して「はい」と回答した割合が県平均よりも15ポイント高く、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」に対して「はい」と回答した割合は8ポイント高かった。生徒が自他の意見を交流させることに価値を感じていることが確認できる。

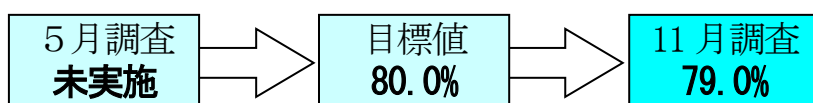
4 (生徒質問紙) 普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



5 (教師質問紙) 普段の授業で、児童生徒の学び合う場を取り入れていますか。

指標 「①よく行っている+②どちらかといえば行っている」の合計



指標の達成に向けた実践

1 話し合う課題の精選、場の設定の工夫

各教科で、話し合いによって理解が深まる課題の精選と、話し合いの手法の工夫を考え実践した。特に本年度は、話し合いを行う前に個人で課題に対する意見をもてるよう、時間配分や手立てを配慮した。数学科では第2学年で既習事項や連立方程式を用いて、江戸時代の「鶴亀算」の課題を解いた。生徒は、既習事項の一次方程式を使ったり表を使ったり、あるいは連立方程式を利用して解を求める。その求め方をワークシートに記入し、まずペアで交流する(図Ⅲ)。さらにグループで交流することで、生徒は一人では思いつかなかった様々な考え方・解き方があることに気づくことができていた。そして、次に問題を解くときには、それらの解き方の中から自分が自信をもって解ける方法を選択しようと意欲を高めることもできた。

また、国語科では第1学年の「矛盾」の授業で、故事成語を現代の生活に置き換える学習活動を行った。その際に、作文構成メモをグループになって読み合い、互いに付箋を使って推敲をアドバイスする交流を取り入れた。生徒は友達の作文構成メモを読み、もっと詳しく知りたいと思ったところや、筋道が通りにくいところを付箋で指摘する。また、上手に書けていると思ったことや、よい例だと思ったことにも付箋を使って評価していく(図Ⅳ)。この活動を通して、自分の構成メモがよりよいものになるだけでなく、友達の構成メモから優れたアイデアを学ぶこともできていた。そして、友達からもらった付箋の内容を参考にし、自信をもって作文を書くことができた。

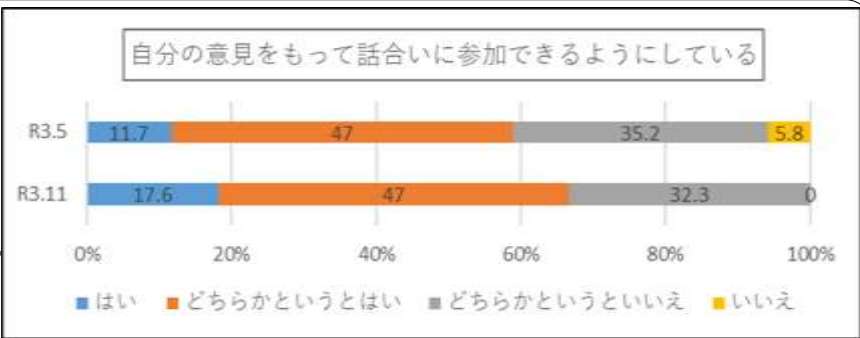


図Ⅲ : 解の求め方を説明し合う (数学)



図Ⅳ : 付箋でアドバイスをする (国語)

また、教員対象の授業アンケートでは、「自分の意見をもって話し合いに参加できるようにしている」という問いに対する肯定的な回答が5.9ポイント増加するとともに、「いいえ」という回答がなくなった。目的をもって話し合いを行い、意見の深まりや広がりをもたせようと工夫している教員の考えが分かる（図V）。

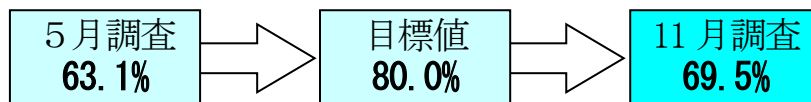


図V : 授業アンケート (教員対象)

このように、話し合いの事前段階での工夫や時間配分によって、話し合い活動をより意味のある活動にすることができている。

## 6 (生徒質問紙) 授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計

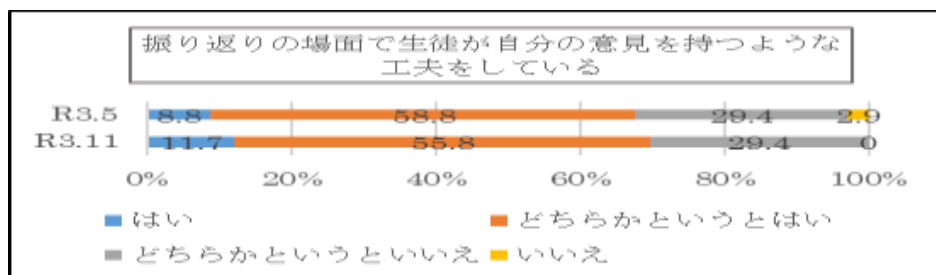


### 指標の達成に向けた実践

#### 1 自らの学びを確認する振り返りの工夫

各教科で授業後、あるいは單元ごとに学習を振り返る活動を実施し、生徒が自らの学びを確認し、調整して、新たな課題を見つけることを目的とした。学活では、学級力向上プロジェクトでの活動の振り返りを行い、自分たちの活動状況を評価するだけでなく、これからの生活を改善するためにどうすればよいか、更に次の活動につなげる振り返りが行えた。そのことを受け、各教科でも学級力向上プロジェクトの流れと同様に、「問題をつかむ」「解決策を出す(個人)」「他の意見と比べる」「練り直す」「振り返る」といった一連の学習過程を踏まえて授業を行えば、生徒も取り組みやすいのではないかと考え、実施していこうと努めた。

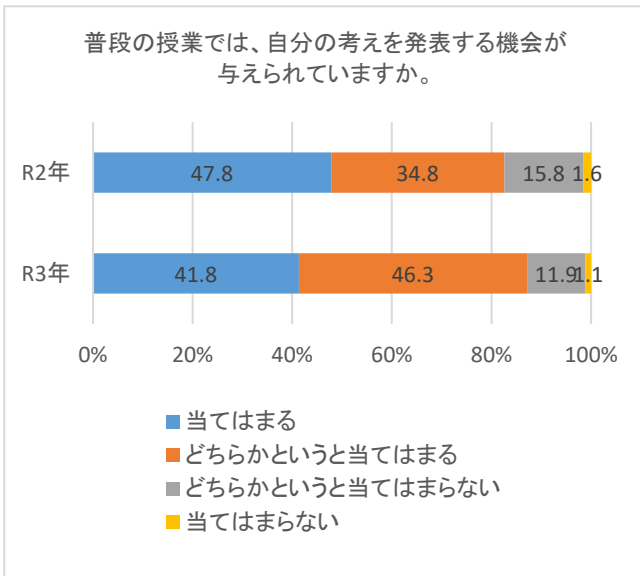
教員対象の授業アンケートでは、「振り返りの場面で生徒が自分の意見をもつような工夫をしている」という問いに対し、「はい」と回答した教員が3ポイント増え、「いいえ」と回答した教員がいなくなっていることが分かる（図VI）。教員が授業で「振り返り」を意識して行ったことがうかがえる。そして、それが、生徒アンケートの結果にも反映されていると考えられる（指標6）。



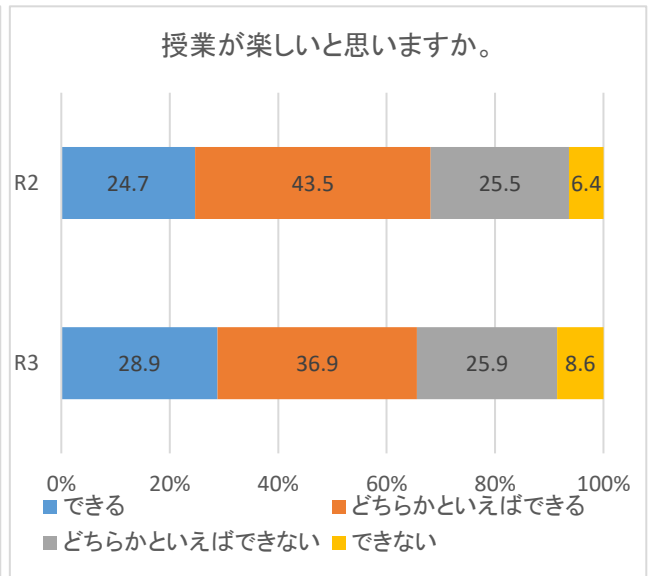
図VI : 授業アンケート (教員対象)

## IV 研究の成果と課題

### ◆ 研究の成果



図VII：生徒質問紙調査



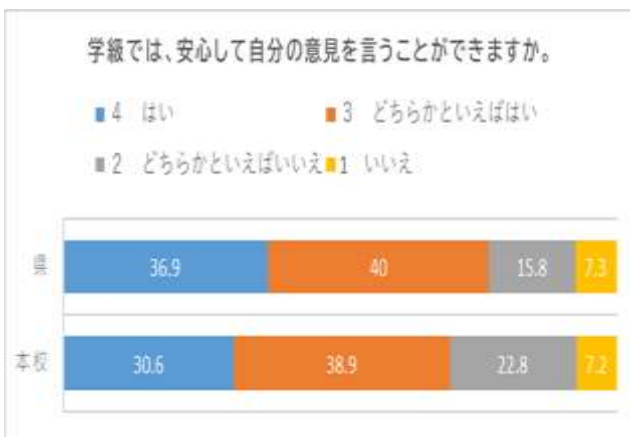
図VIII：生徒質問紙調査

教員が生徒理解を深め、授業の中でも受容的風土の醸成を図るよう授業改善をしてきたことで、自分の意見に自信をもって、主体的に課題を解決しようとする態度が育ってきたと考えられる（図VII）。また、友達の意見を尊重しながら交流することができたため、ともに学ぶことが楽しく価値があると感じている（図VIII、指標3、4）。

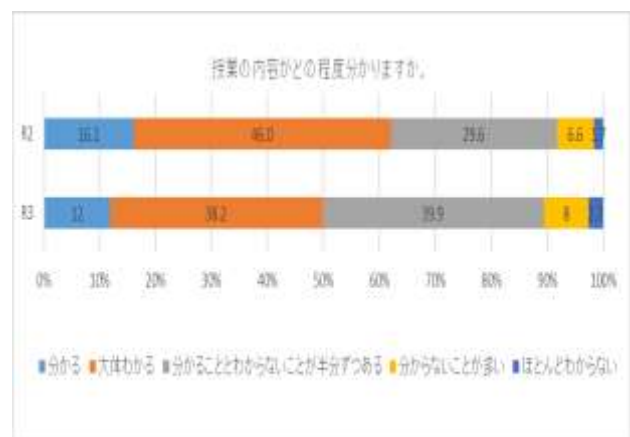
今後も生徒理解に基づく授業改善を行い、すべての生徒が協働して意欲的に学習に向かう力を身につけさせたい。

### ◆ 今後の課題

「学級で安心して自分の意見を言うことができますか」という質問に対する肯定的回答が県平均を下回っていることが分かる（図IX）。また、「授業の内容がどの程度分かりますか」という問いに対して、半分以上分からないと回答する生徒の割合も増加している（図X）。授業に対して意欲的に向かい、話し合い活動も行われているのにこのアンケート結果であるということは、学級の中で「分からないから教えてほしい」と言い出しがたい雰囲気はまだあるのだと推測できる。さらにピア・サポートや道徳の学習の中で、支え合えるあたたかな集団作りの推進が求められる。また、学級力向上プロジェクトで行う指導過程と同じ型で各教科の授業を行い、生徒の思考の中で学びと振り返りがつながるようにすることが必要である。教員が「振り返り」の場を行う場面の設定を工夫するようになってきているので（指標6）、今後は、振り返りの内容を「学習内容」と「主体的な学びの面」の両面で精査し、方法を工夫していきたい。



図IX：生徒質問紙調査



図X：生徒質問紙調査